

サイクル ナッチ波動

『**サイクル**理論』

+

『**フィボナッチ**リトレースメント』

+

『**エリオット**波動』

による複合的な相場の捉え方

始めに

この度は、書名『サイクルナッチ波動』をダウンロード頂きありがとうございます。

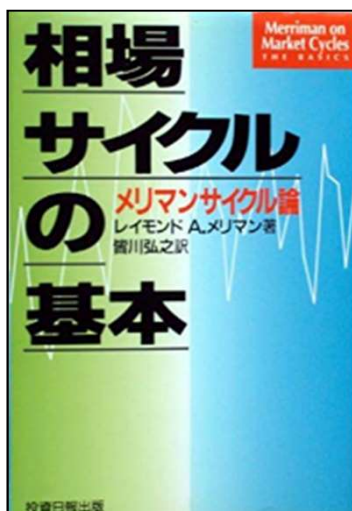
本書は、サイクル理論を土台に、フィボナッチリトレースメントやエリオット波動を加えた視点から相場の流れを掴む力を養うことを目的としています。

内容としては、サイクル理論、フィボナッチリトレースメント、エリオット波動を各々学んでから、最後に複合的な見方を深めていく流れとなります。

本書は、投資・FXの中級者以上の知識をお持ちの方であれば読破できる内容となっていますが、基礎的な知識については割愛していますので、必要に応じて別の教材等をご利用下さい。

本書の半分以上サイクル理論の学習となります。サイクルの基本的な考えは網羅できるように執筆しましたが、さらに知識を深めたい方は、レイモンドAメリマン著の『相場サイクルの基本』をお読み頂ければと思います。

サイクルを理解することにより、今までとは違った視点から相場を俯瞰することができますので、トレード向上にお役立て下さい。



目次	ページ
はじめに	2
サイクル理論	4
サイクルの型	5
位相とサイクルの種類	6
強気相場 第1パターン(3位相)の特徴	7
強気相場 第2パターン(2位相)の特徴	8
強気相場 第3パターン(コンビネーション)の特徴	9
弱気相場 第1パターン(3位相)の特徴	10
弱気相場 第2パターン(2位相)の特徴	11
弱気相場 第3パターン(コンビネーション)の特徴	12
フィボナッチリトレースメントとは	13
フィボナッチリトレースメント+サイクル理論の考え方	14
エリオット波動とは	15
エリオット波動 + サイクル理論の考え方	16
サイクル理論+フィボナッチリトレースメント+エリオット波動	17
最後に	18

サイクル理論

サイクルの定義

相場は『一定の周期(サイクル)で安値(ボトム)をつける現象』

ただし常に100%の規則性はなく、それは80%以上の確率で起こるというものです。



↑ ドル円日足チャート(2017年12月末～2020年2月上旬)

オーブ(許容範囲)

サイクルには、中心までの期間とオーブと呼ばれる許容範囲があります。オーブは通常のサイクル期間として取り扱われ、サイクルの中心の6分の1程度とされています。

例えば18週サイクルの場合、6分の1である3週がオーブとなり、18週の前後3週である15週から21週までは正常の範囲とされます。この正常な範囲が相場では80%以上の確率で起こるとされています。

支配性

全てサイクルはより大きいサイクルの一部です。言い換えると大きいサイクルはより小さいサイクルが集まって構成されています。大きいサイクルが終了する時、小さいサイクルの正常で終わる時間帯を歪ませてしまう場合があります。これを支配性と言います。

この現象でより小さいサイクルは、正常な範囲を超えて短縮されて終了したり、延長されて終了したりします。

短縮

サイクルがオーブを超えて前倒しで終了した場合、サイクルが「短縮」したと言います。例えば18週サイクルが15週未満で終了すれば、それは短縮サイクルとなります。

この現象は、より大きいサイクルが終了する時に起こりやすいとされています。なので、より大きいサイクルの中間点でサイクルが短縮されることは稀です。

延長

サイクルがオーブを超えて先送りして終了した場合、サイクルが「延長」したと言います。例えば18週サイクルが21週を超えて終了すれば、それは延長サイクルとなります。

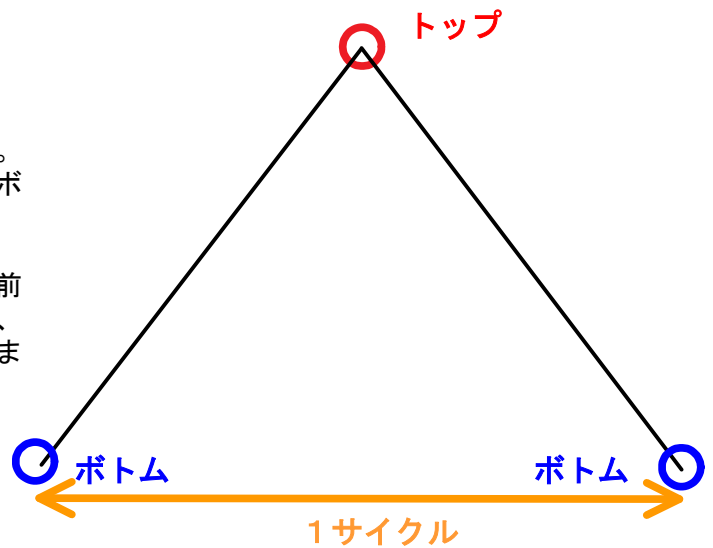
この現象は、「短縮」同様に、より大きいサイクルが終了する時に起こりやすいですが、「短縮」ほど頻繁には起こりません。

サイクルの型

サイクルのトップとボトム

サイクルは通常、チャートで測定されます。
1サイクル中の始まりと終わりの安値は『ボトム』と呼ばれ、1サイクル中の高値を『トップ』と呼びます。

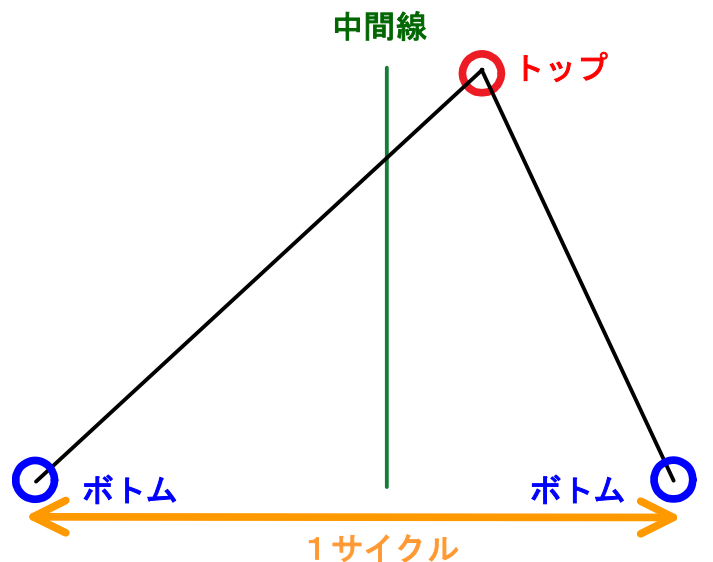
1サイクルの始まりは、同時にその一つ前のサイクルの終わりでもあります。同様に、1サイクルの終わりは、次のサイクルの始まりでもあります。



強気型

1サイクルのトップはサイクルの中間点以降(半分より右側)で出現する傾向です。この現象をライト・トランスレーションと呼びます。

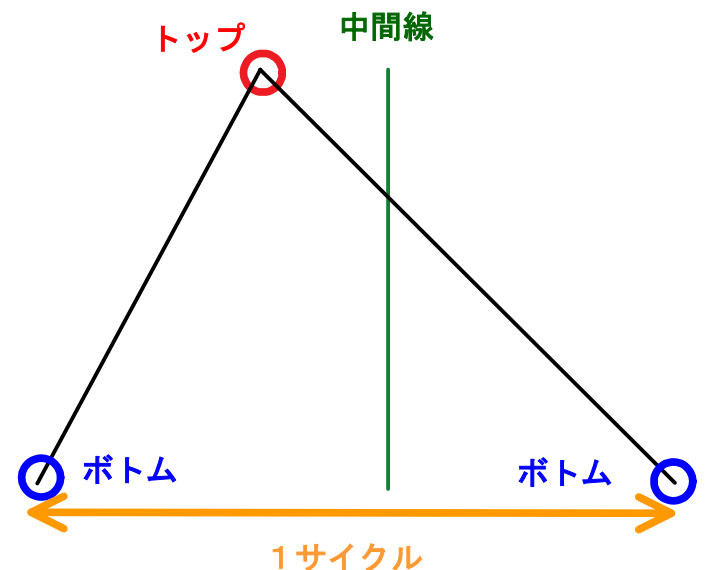
1サイクル期間中で見ると価格が下降するより上昇する時間の方が長くなります。



弱気型

1サイクルのトップはサイクルの中間点以前(半分より左側)で出現する傾向です。この現象をレフト・トランスレーションと呼びます。

1サイクル期間中で見ると価格が下降するより上昇する時間の方が長くなります。

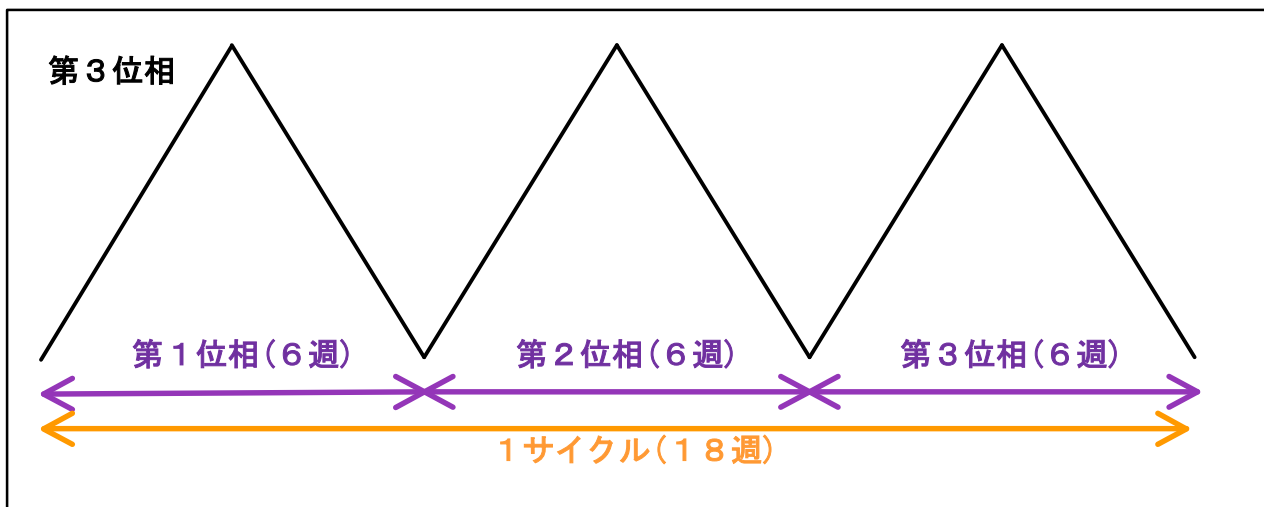
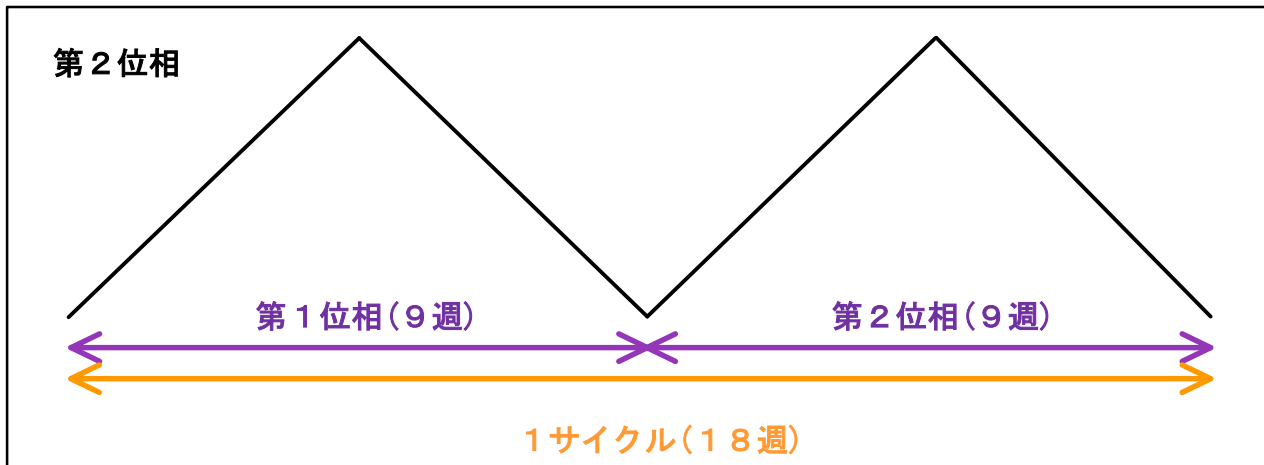


位相とサイクルの種類

位相

1サイクルは、その中に次に小さいサイクルが2つ以上入って構成され、小さいサイクルのことを「位相」と呼び、2つないし3つ(稀に4つ)で構成されています。

例えば1つのサイクルが18週であれば、2つの場合は9週×2、3つの場合は6週×3の構成になります。

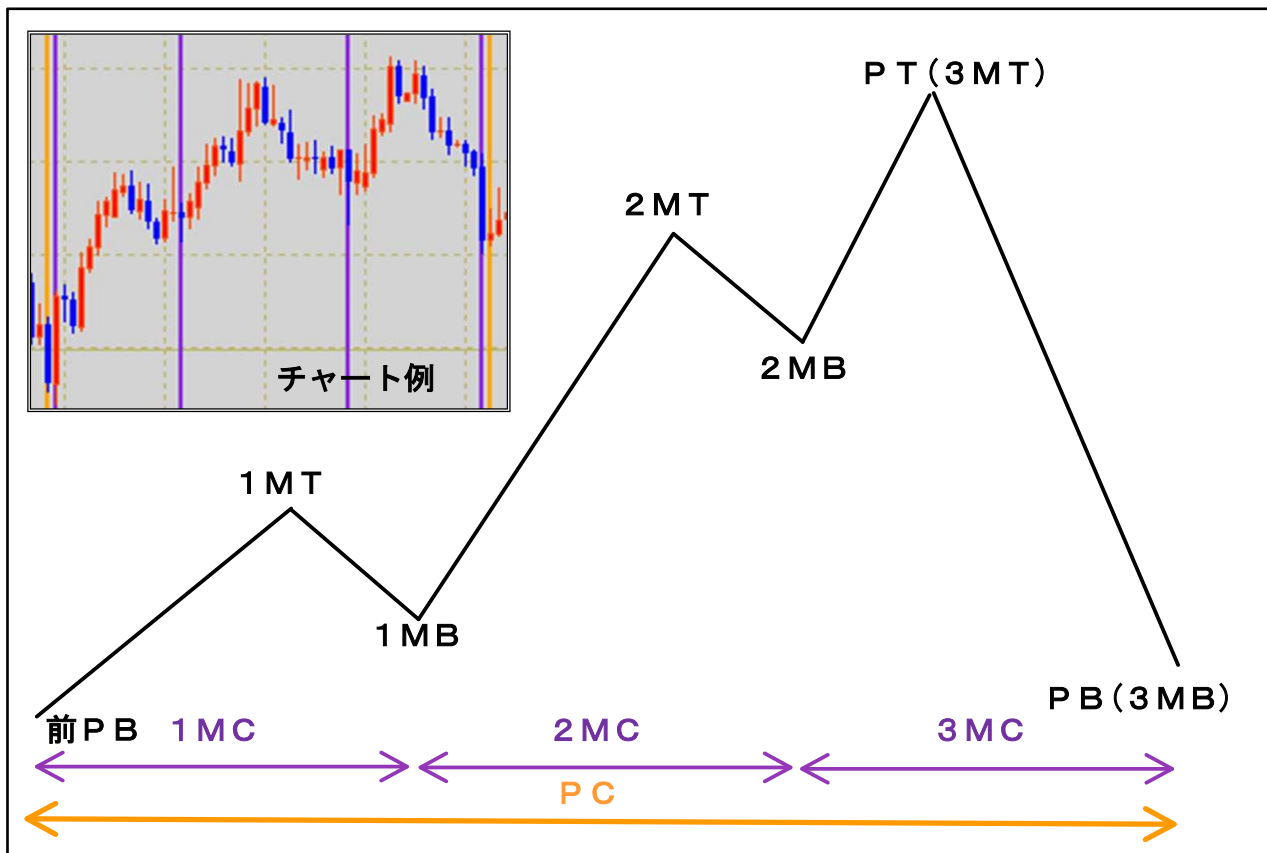


サイクルの種類

サイクルの種類は無数にあり、プライマリーサイクルを超える長期サイクルは『〇週サイクル』と称します。逆にベータサイクルを下回るサイクルの名称は、特に定まっていません。

サイクルの大きさ	サイクル種類	サイクル周期(目安)
大	長期サイクル	30週以上
↓	プライマリーサイクル	18～30週
↓	メジャーサイクル	6～18週
↓	トレーディングサイクル	2～6週
↓	アルファサイクル	1～2週
小	ベータサイクル	2～6日程度

強気相場 第1パターン(3位相)の特徴



上図では**プライマリーサイクル(PC)**の中に、**メジャーサイクル(MC)**が包括されることを例にしています。

略名の説明

PT=プライマリーサイクルトップ

PB=プライマリーサイクルボトム

前PC=一つ前のプライマリーサイクルボトム

MT=メジャーサイクルトップ

MB=メジャーサイクルボトム

1 MC=第1位相

2 MC=第2位相

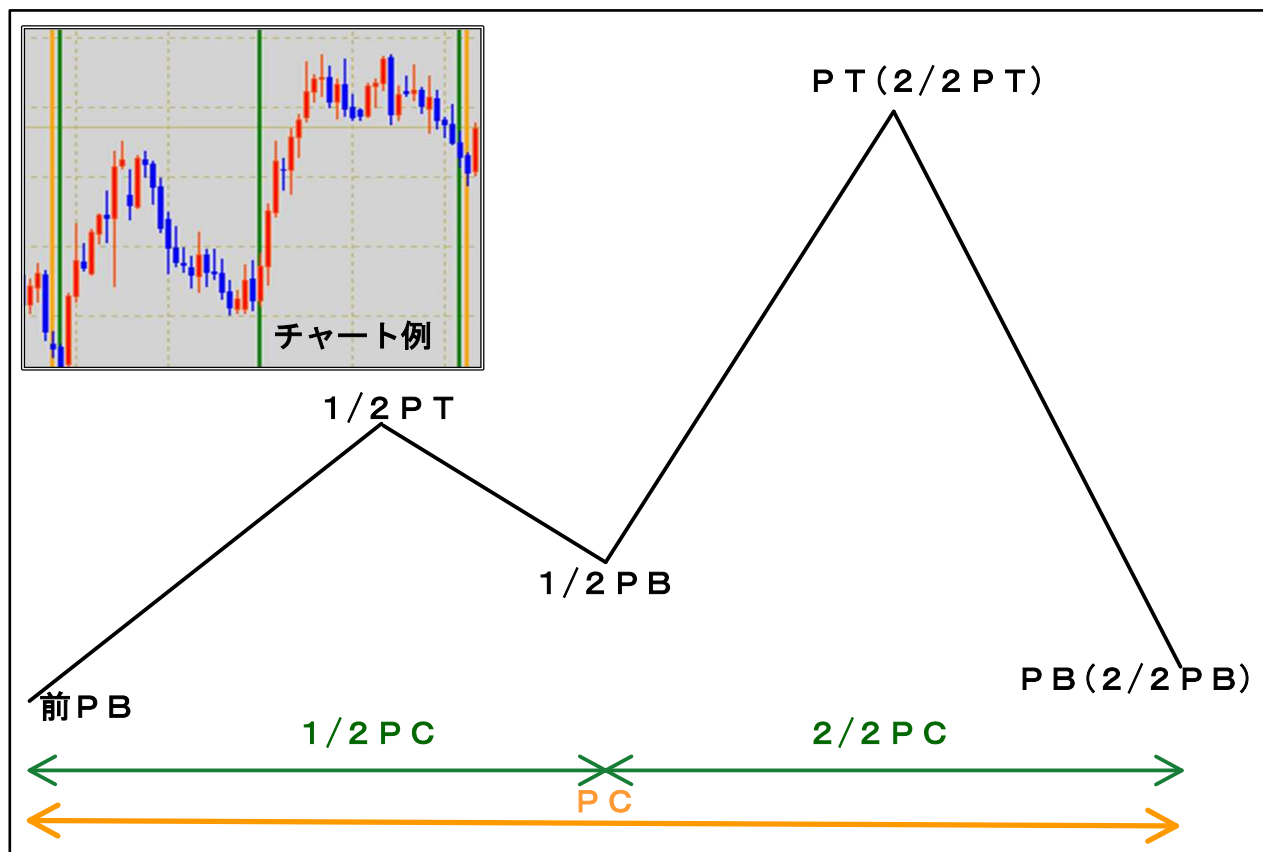
3 MC=第3位相

強気相場 第1パターンの特徴

高値、安値を切り上げて全体的に右肩上がりの相場になりやすい。

- **1MC**は、強気型(ライト・トランスレーション)の傾向。
- **2MC**は、強気型(ライト・トランスレーション)の傾向。
 - ・ PC最高値は2MCの後半に出現する可能性がある。
- **3MC**は、弱気型(レフト・トランスレーション)の傾向。
 - ・ PCの最高値は3MCに出現する傾向。
 - ・ 支配性の歪みが発生した場合、PT(3MT)は2MTを上回らないかもしれない。その場合、2MTがPTとなる(4MTが存在した場合4MTがPTをつけるかもしれない)。
 - ・ PTからPBの期間は、PC期間帯の8分の1から2分の1未満(概ね6分の1から3分の1)に収まる。
 - ・ PBは前PBを下回らない(但し支配性の歪みが発生した場合、前PBを下回ることがある)。
 - ・ 最終相位は、さらに大きなサイクルの支配性の影響で短縮や延長される場合がある。

強気相場 第2パターン(2位相)の特徴



上図では**プライマリーサイクル(PC)**の中に、**ハーフプライマリーサイクル(1/2・2/2PC)**が包括されることを例にしています。

略名の説明

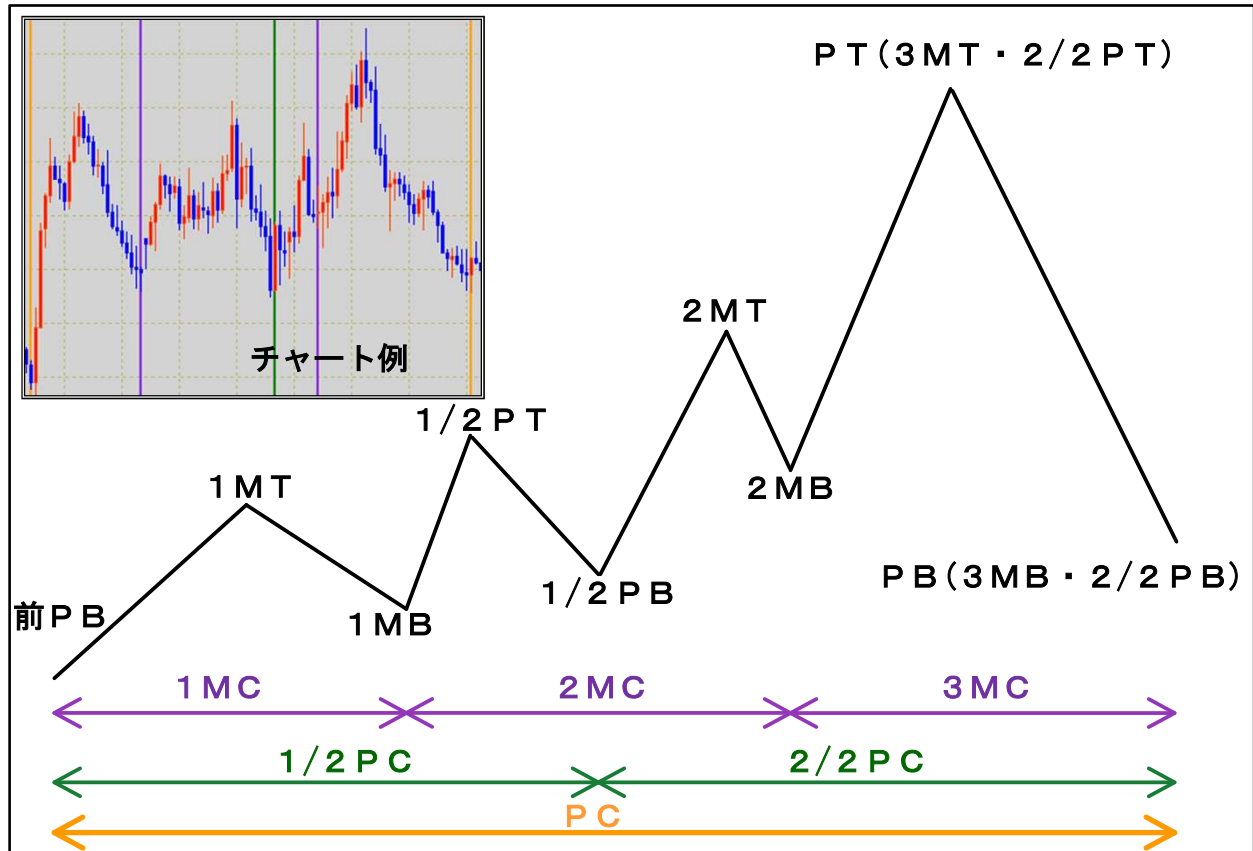
PT=プライマリーサイクルトップ 1/2・2/2PT=ハーフプライマリーサイクルトップ
 PB=プライマリーサイクルボトム 1/2・2/2PB=ハーフプライマリーサイクルボトム
 前PC=一つ前のプライマリーサイクルボトム

強気相場 第2パターンの特徴

高値、安値を切り上げて全体的に右肩上がりの相場になりやすい。

- **1/2PC**は、強気型(ライト・トランスレーション)の傾向。
- **2/2PC**は、強気型(ライト・トランスレーション)か弱気型(レフト・トランスレーション)になるか五分五分。
 ・最終相位は、さらに大きなサイクルの支配性の影響で短縮や延長される場合がある。

強気相場 第3パターン(コンビネーション)の特徴



上図ではプライマリーサイクル(PC)の中に、メジャーサイクル(MC)とハーフプライマリーサイクル1/2・2/2(PC)が包括されることを例にしています。

上図のアルファベット略名の説明は、7・8ページをご参照下さい

強気相場 第3パターンの特徴

- ・ 第1パターン、第2パターンの混合型。
- ・ 1MC以外は全て歪む場合もある。
- ・ 全体的に強気か弱気が見分け難い場合があり、レンジ相場になる可能性がある。

● 1MCは、強気型(ライト・トランスレーション)の傾向。

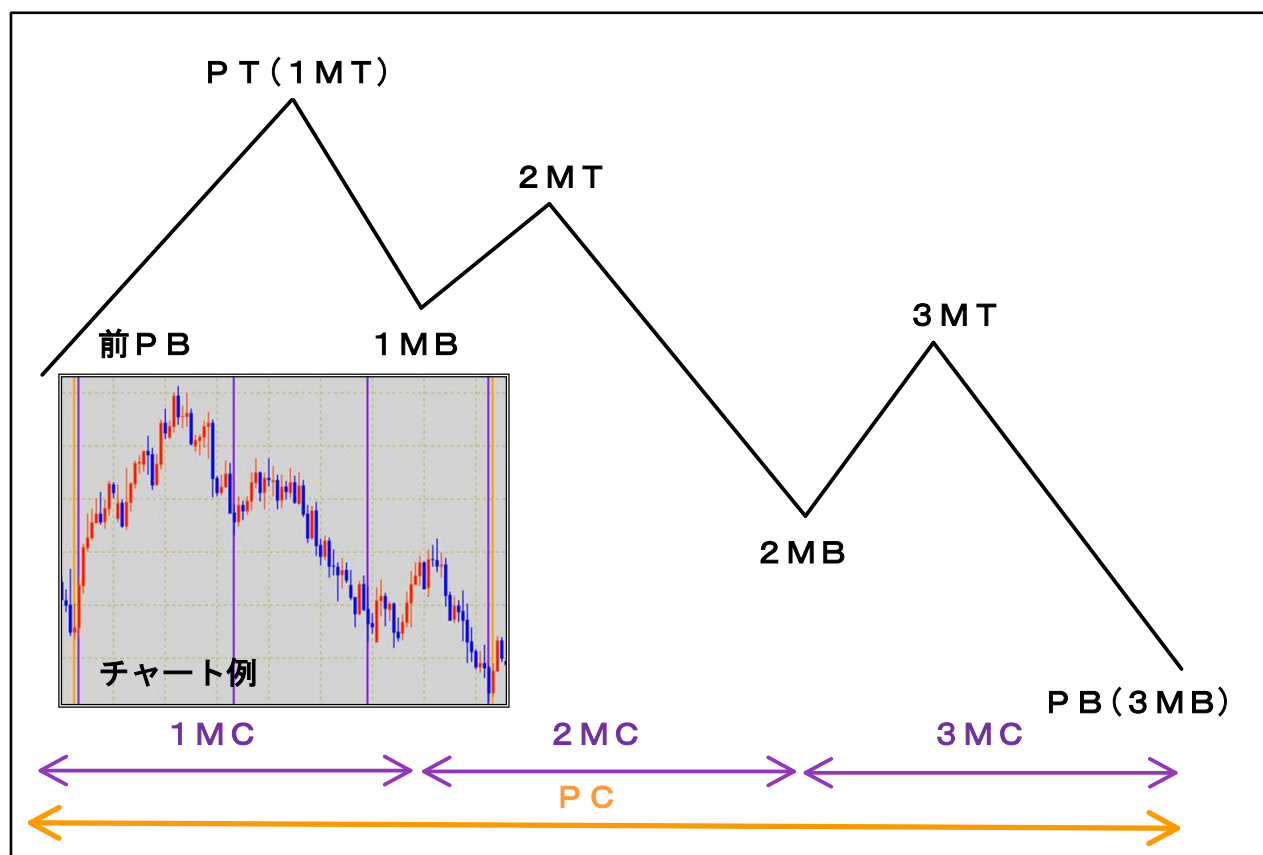
● 1MB後は、短期間で1/2PTまで急騰する可能性がある。

- ・ 1/2PTは、1MTを更新しない可能性がある。
- ・ 1/2PBは、1MBを切り下げてくる可能性がある。
- ・ 1/2PBが、1MBを下回らない場合、2MTに早く到達する可能性、あるいは緩やかに反騰し2MTは、1/2PTを更新せずに、2MBに向けて下落する可能性がある。

● 3MCは、弱気型(レフト・トランスレーション)の傾向。

- ・ PTは2MTを更新しない可能性がある。
- ・ 最終相位は、さらに大きなサイクルの支配性の影響で短縮や延長される場合がある。

弱気相場 第1パターン(3位相)の特徴



上図ではプライマリーサイクル(PC)の中に、メジャーサイクル(MC)が包括されることを例にしています。

略名の説明

PT=プライマリーサイクルトップ

PB=プライマリーサイクルボトム

前PC=一つ前のプライマリーサイクルボトム

MT=メジャーサイクルトップ

MB=メジャーサイクルボトム

1 MC=第1位相

2 MC=第2位相

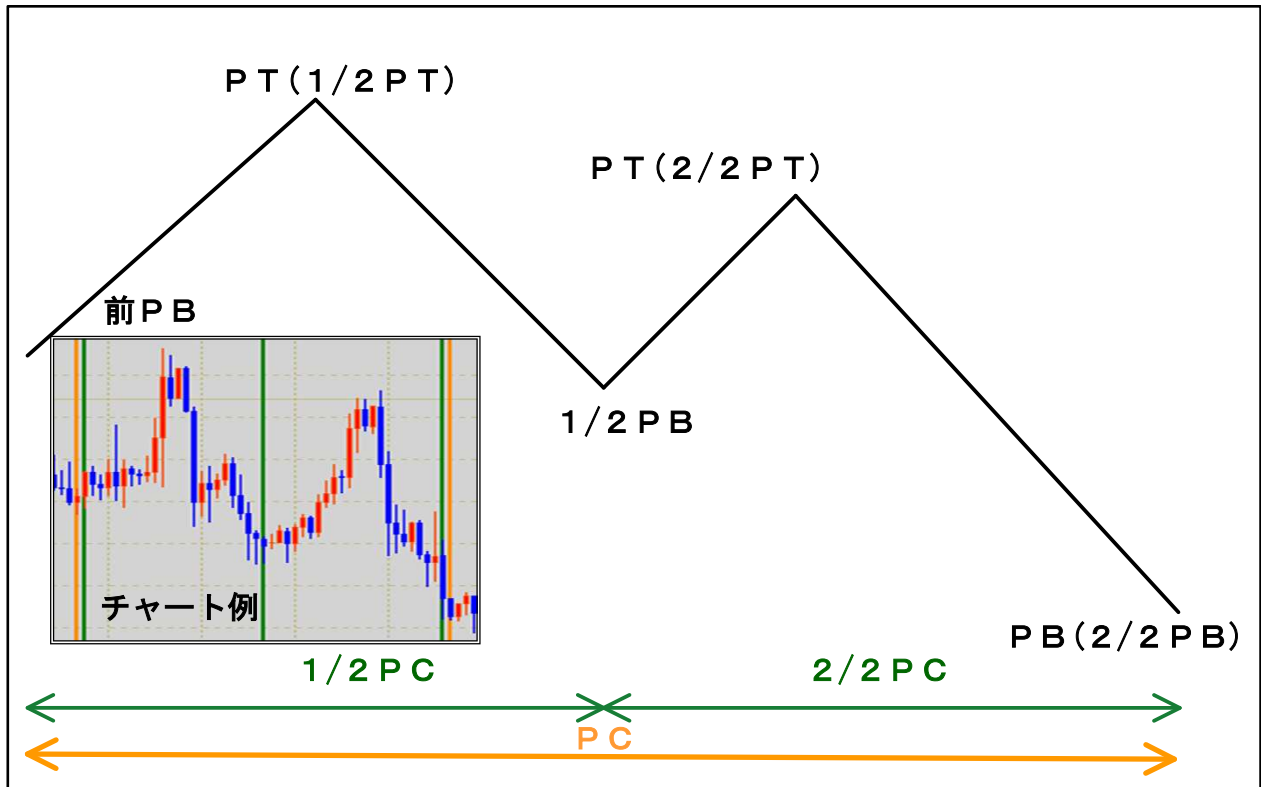
3 MC=第3位相

弱気相場 第1パターンの特徴

高値、安値を切り下げて全体的に左下がりの相場になりやすい。

- **1MC**は、強気型(ライト・トランスレーション)の傾向。
 - ・ 前PBからPTの期間は、PC期間帯の8分の1から2分の1未満(概ね6分の1～3分の1)
 - ・ 通常1MBは、前PBを下回らないが、時として下回る。それは非常に弱い相場の可能性。
- PTは通常1MTで出現するが、時として2MTの場合もある(つまり2MTがPTとなる)。
- **3MC**は、弱気型(レフト・トランスレーション)の傾向。
 - ・ 2MBから3MTの反騰は、1MT、2MTと比べ弱く、時に揉合いで天井の見極めが困難。
 - ・ 3MTからPBの期間が延長された場合(4MCとして)3MBでPBにならず、4MCとして弱い反騰を見せて4MTをつけてからPBを付けるかもしれない。
 - ・ その場合、相場崩壊の総投げのボトムか、あるいは3MBをわずかに切ったボトムになる。
 - ・ 最終相位は、さらに大きなサイクルの支配性の影響で短縮や延長される場合がある。

弱気相場 第2パターン(2位相)の特徴



上図ではプライマリーサイクル(PC)の中に、ハーフプライマリーサイクル($1/2 \cdot 2/2PC$)が包括されることを例にしています。

略名の説明

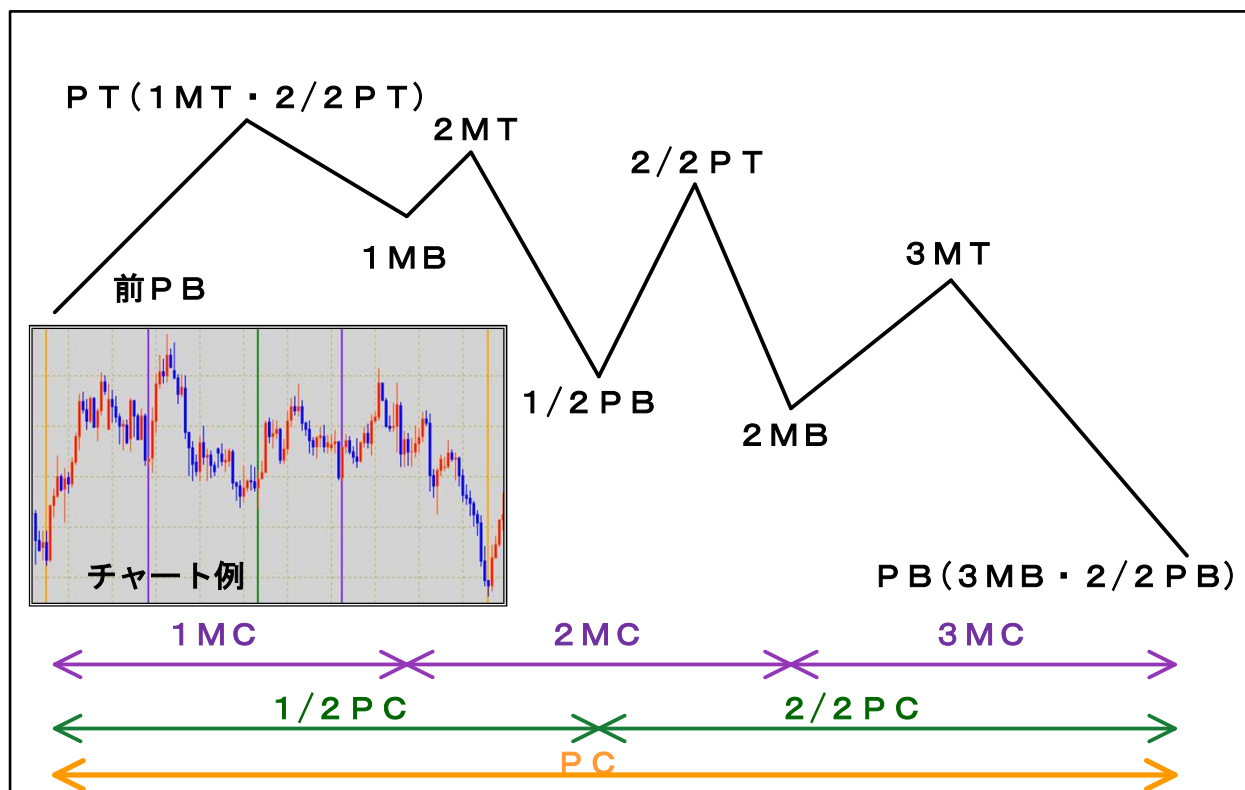
PT=プライマリーサイクルトップ $1/2 \cdot 2/2PT$ =ハーフプライマリーサイクルトップ
PB=プライマリーサイクルボトム $1/2 \cdot 2/2PB$ =ハーフプライマリーサイクルボトム
前PC=一つ前のプライマリーサイクルボトム

弱気相場 第2パターンの特徴

高値、安値を切り下げて全体的に左下がりの相場になりやすい。

- $1/2 PC$ は、強気型(ライト・トランスレーション)の傾向。
 - ・ 前PBからPTの期間は、PC期間帯の8分の1から2分の1未満(概ね6分の1～3分の1)
 - ・ $1/2 PB$ は前PBを下回らない場合がある。前PBは支持線となる場合もある。
- $2/2 PC$ は、弱気型(レフト・トランスレーション)の傾向。
 - ・ PTからPBの期間は長く、通常「総投げ」である。
 - ・ 最終相位は、さらに大きなサイクルの支配性の影響で短縮や延長される場合がある。

弱気相場 第3パターン(コンビネーション)の特徴



上図では**プライマリーサイクル(PC)**の中に、**メジャーサイクル(MC)**と**ハーフプライマリーサイクル 1/2・2/2(PC)**が包括されることを例にしています。

上図のアルファベット略名の説明は、10・11ページをご参照下さい

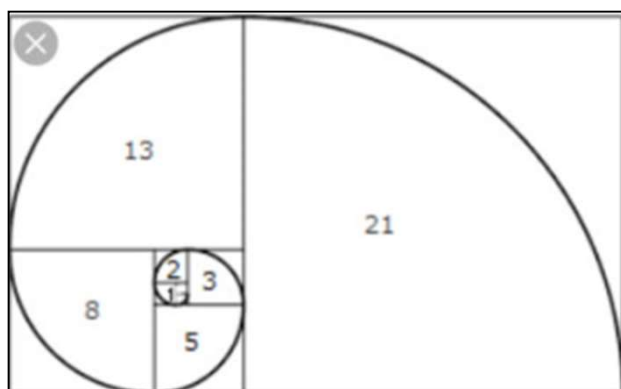
弱気相場 第3パターンの特徴

- ・第1パターン、第2パターンの混合型。
 - ・1MC以外は全て歪む場合もある。
 - ・全体的に、**強気か弱気が見分け難い**場合があり、**レンジ相場になる可能性**がある。
- **1MC**は、強気型(ライト・トランスレーション)の傾向。
 - **2MT**は1MTを上回る場合もある(その場合2MTがPTとなる)
上回らない場合、ダブルトップを形成する可能性がある。
 - **2MB**後は、1/2PBを下回らない場合がある。
・2MBから3MTの反発力は弱い、もしかしたら揉み合い(レンジ相場になる可能性)
 - **3MC**は、弱気型(レフト・トランスレーション)の傾向。
・時として3MTが出現しないこともある、つまり2MBからPBをつける可能性がある。
・最終相位は、さらに大きなサイクルの支配性の影響で短縮や延長される場合がある。

フィボナッチリトレースメントとは

フィボナッチリトレースメントは、イタリアの数学者レオナルド・フィボナッチ氏が研究したもので、『引き返す、後戻りする』という意味のリトレースメントが合わさり、命名されています。

数あるフィボナッチ分析の中でも一般的かつ代表的なもので、使い方は、高値と安値の値幅にフィボナッチ比率(主に23.6%、38.2%、50.0%、61.8%、76.4%)をかけて、どこがサポート・レジスタンスになるか判断します。



フィボナッチ比率は、 $0+1=1$ 、 $1+1=2$ 、 $2+1=3$ ……つまり『隣り合わせの数字の和』になります。この数列はお花の花びらやヒマワリの実の数など自然界でも多く出現し、パルテノン神殿やピラミッド、モナリザ、ミロのビーナスなど美術的造形物にも使用され、人間が美しいと感じることや心地が良いと言われています。

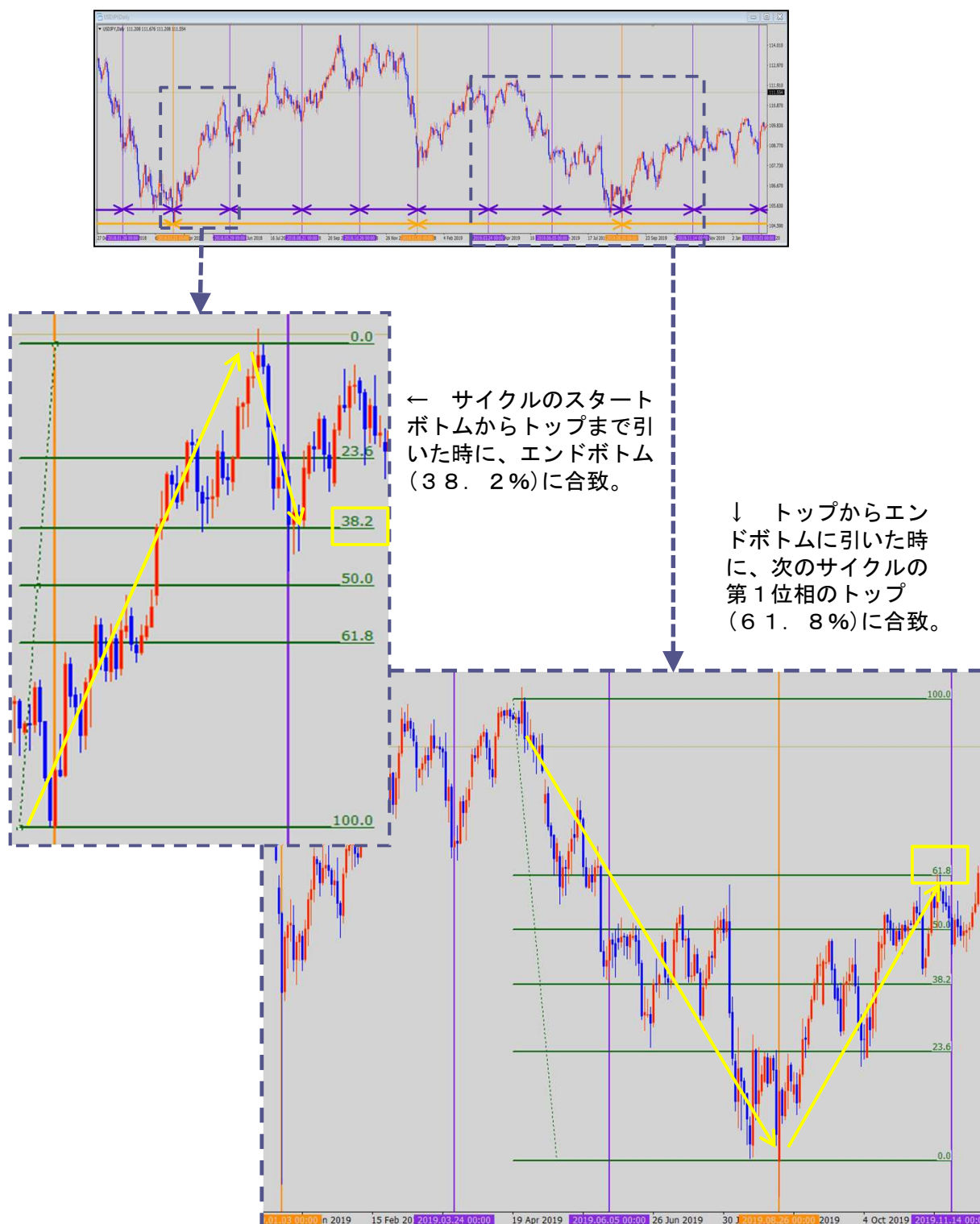
チャートは人間の集団心理が織り込まれています。このフィボナッチ比率とは合致することが多く、不思議な関係にあるのです。



フィボナッチリトレースメント+サイクル理論の考え方

フィボナッチリトレースメントは、サイクル理論とも相性が良いのが特徴です。ボトム～トップ～ボトム～トップの目安として使用します。主に38.2%～61.8%に留まることが多いですが、23.6%や76.4%まで伸びることもあります。

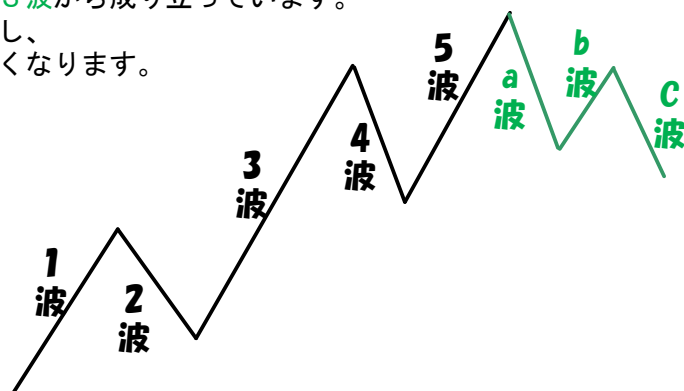
サイクル理論の冒頭に表示してあったドル円のサイクルから実際にズームアップしてみましょう。



エリオット波動とは

エリオット波動はラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、チャート分析方法です。上昇(下降)する推進5波と下降(上昇)する修正3波から成り立っています。

エリオット波動にはルールが存在し、それを知っていると戦略が立てやすくなります。



推進波の種類

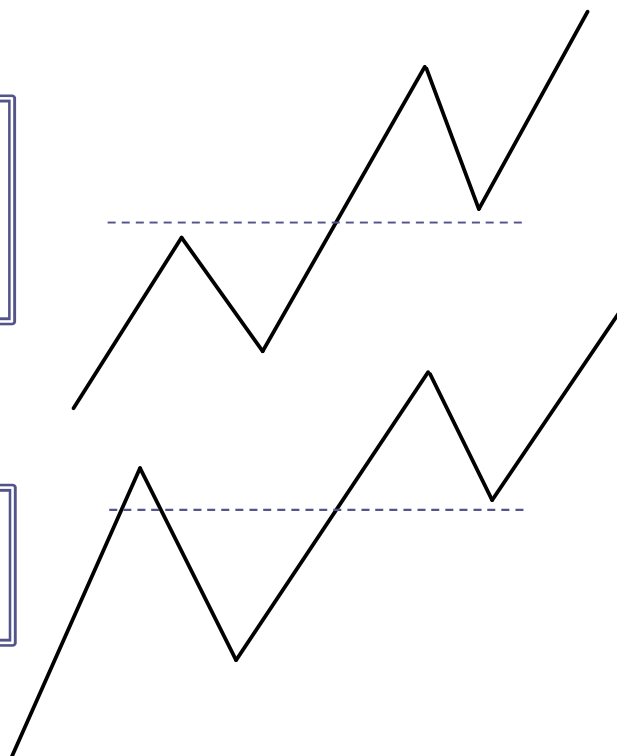
5波形成で成り立つ推進波は『インパルス』と『ダイアゴナル』の2種類あり、一般的に紹介されているエリオット波動の推進波はインパルスで、少し変形した形がダイアゴナルです。それぞれ一定のルールが存在します。

推進波『インパルス』のルール

- ・第2波の終点は第1波の始点を割り込まない
- ・第4波は第1波に重ならない
(第4波の終点が第1波の頂点を下回らない)
- ・第1、3、5波の上昇で第3波が一番小さくなることはない

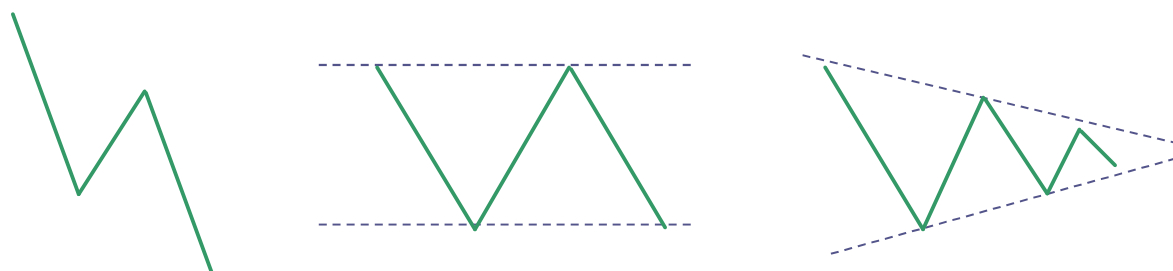
推進波『ダイアゴナル』のルール

- ・第2波の終点は第1波の始点を割り込まない
- ・第4波は第1波に重なる
(第4波の終点が第1波の頂点を下回る)



修正波の種類

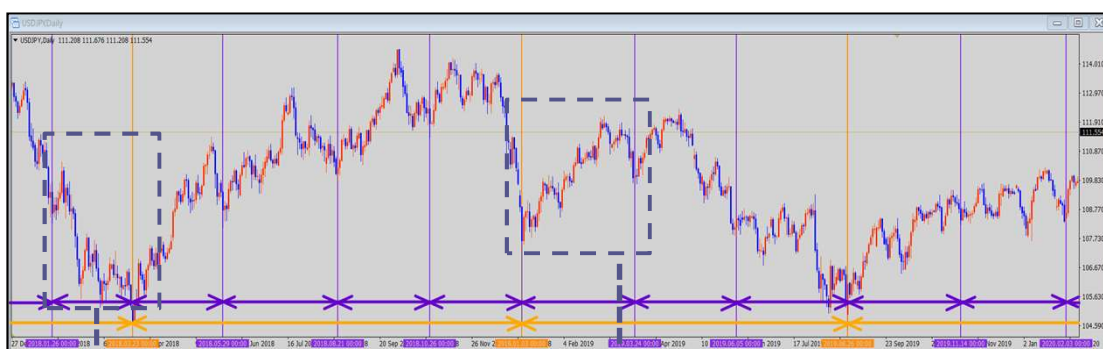
3波形成で成り立つ修正波は『ジグザグ』『フラット』『トライアングル』他、複数存在します。



エリオット波動 + サイクル理論の考え方

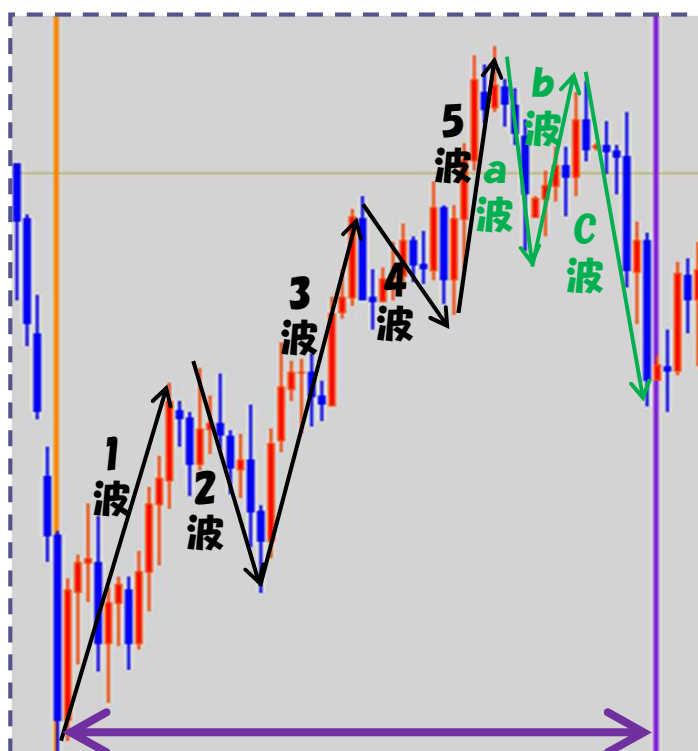
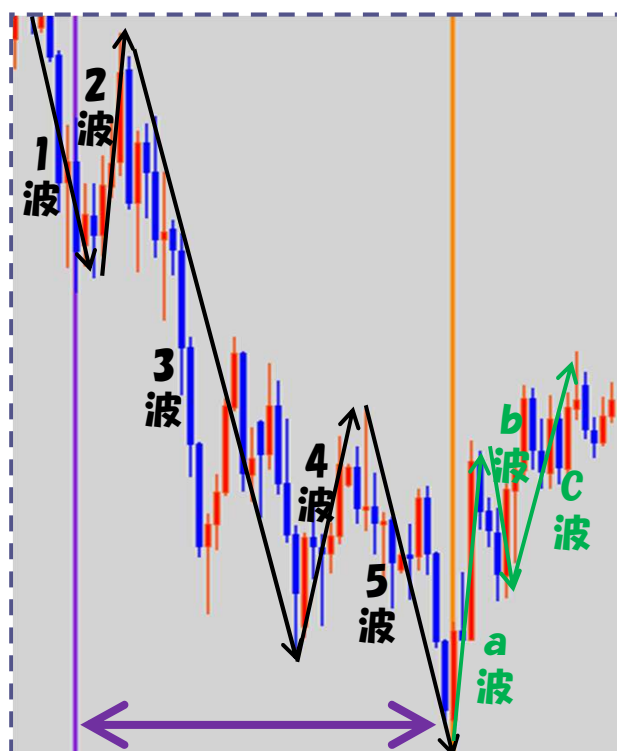
エリオット波動もフィボナッチ同様にサイクル理論と相性が良い分析方法です。
エリオット波動+サイクル理論の考え方では、サイクルボトムに合わせて派が終了します。
また上昇派と下降派では、サイクルのボトムをつけるタイミングが異なるのが特徴です。

サイクル理論の冒頭に表示してあったドル円のサイクルからエリオット波動にズームアップしてみましょう。



下降派では、推進5波目の
終了時にボトムをつけます。

上昇派では、修正3波目(C派)
の終了時にボトムをつけます。

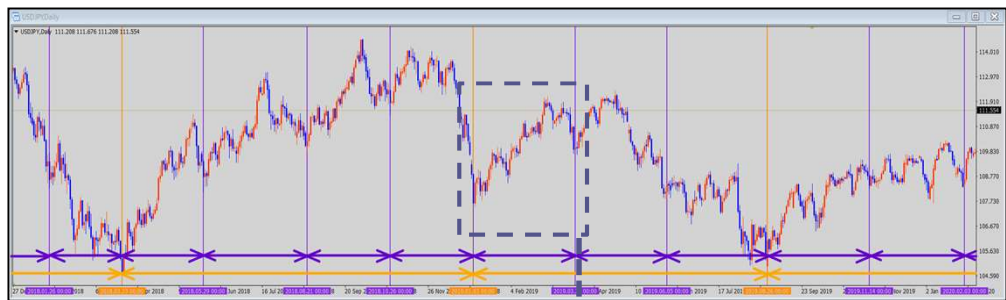


サイクル理論+フィボナッチリトレースメント+エリオット波動の考え方

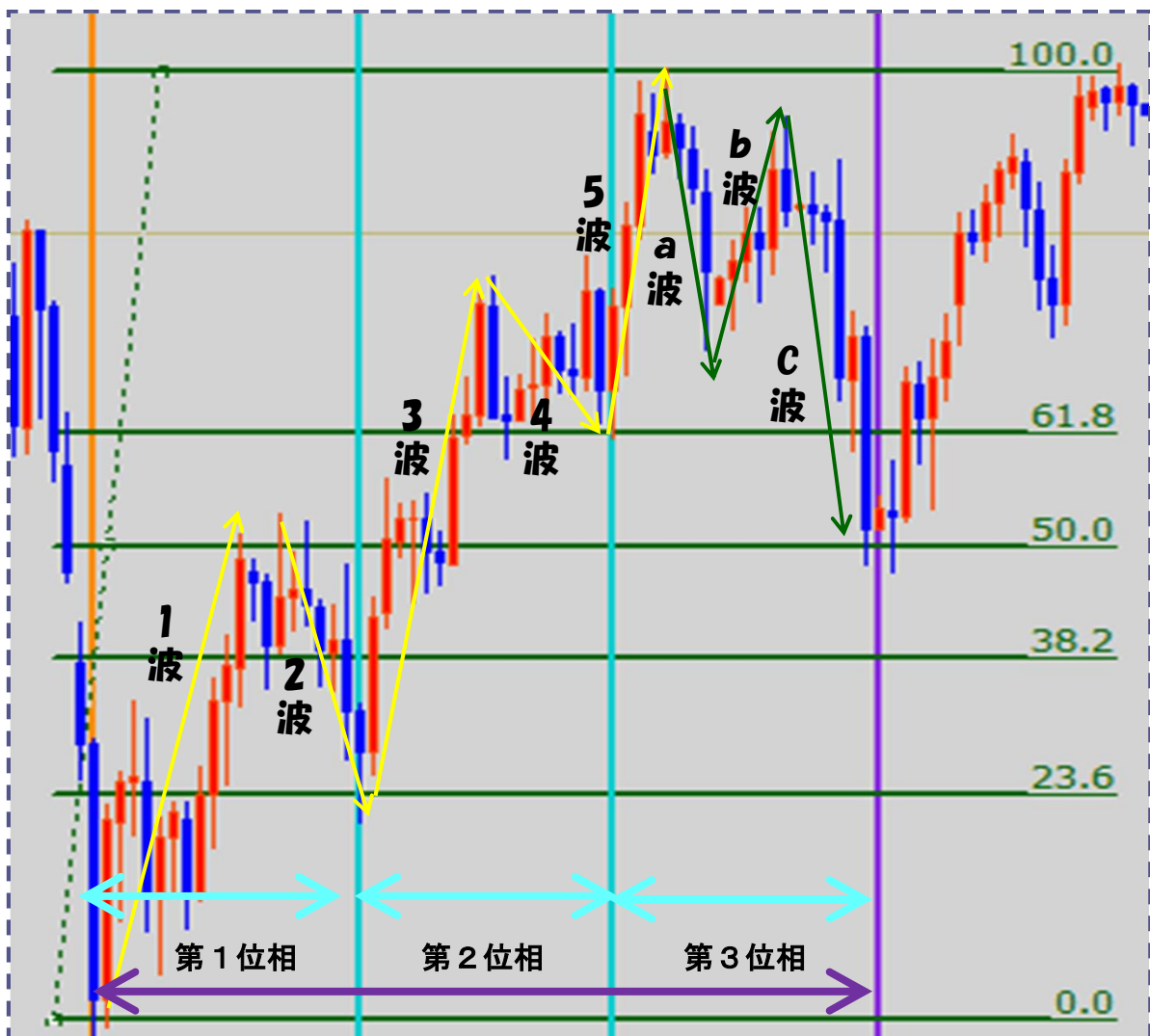
サイクル理論とフィボナッチリトレースメントとエリオット波動の複合です。

上手くトレードできると大きく利益を取ることが可能です。

サイクル理論の冒頭に表示してあったドル円のサイクルから実際にズームアップしてみましょう。



第1位相でエリオット波動の1波・2波を担い
第2位相でエリオット波動の3波・4波を担い
第3位相でエリオット波動の5波と修正3波を担い
フィボナッチリトレースメントの50.0%で
ボトムをつけるキレイな複合となりました。



最後に

いかがだったでしょうか。

サイクル目線で相場を俯瞰してきた著者から思ったことや気づきを何点か後述していきますので参考になれば幸いです。

●サイクル理論を理解すると、相場に対して自分の尺度を持つことができ、今の相場の位置はどこら辺にいるのか、そしてこれからどんなチャートの形になるのかをパターン化した考え方を持つことができます。

さらにフィボナッチリトレースメントやエリオット波動を組み合わせることで、より戦略を立てやすくなります。

●サイクルの種類では、期間の小さいアルファサイクル、ベータサイクルより小さいサイクルも存在しますので、デイトレードでも適用できます。しかし、支配性を考慮して思考する頻度が多くなってしまい、迷いが生じてしまう恐れがあります。

そのためサイクル理論は、長時間チャートをじっくり研究することができるスイングトレーダー向きであると個人的に思います。

●サイクル理論等を手法とした場合、転換点を根こそぎ狙える利点があるものの、反転しなかった時のリスクも大きいため、徹底したリスク管理を行うことを推奨します。

そしてどちらかという手法ではなく環境認識として利用する方が良いのではないかと考えています。

●サイクル理論でボトムやトップを的中させると高揚感を味わうことができますが、相場には『絶対』や『確実』というものはないことを強くお伝えします。

最後までお読みいただきありがとうございます。

皆さまのトレードが上手くいくことを願っています。

2020年3月 baku